中国知識人を研究する方法について

土屋　昌明

楠原俊代著
韋君宜研究
記憶のなかの中国革命

A5判　554頁
中国書店
［本体10000円＋税］

一

本書は、中国の著名な作家・韋君宜に関する、日本で唯一の専著である。韋君宜は、人民文学出版社社長を勤め、六〇歳をすぎてから自分の経験を書いた。彼女は、自分の記憶のなかの中国革命（文化大革命を含む）について思索し、中国人が同じ誤りを繰り返さないために著述した。本書はそんな彼女の著作一二冊を分析して、「中国革命の「真実」を再構築しようとする」（著者まえがき）ものである。

本書の前半は韋君宜の回想録『思痛録』の翻訳、後半は一九三〇年代から文革時期までの韋君宜に関する楠原氏の論考から成る。読み進むうちに、この二部構成がじつは有機的に関連し合っていることに気がついた。それは、韋君宜の文学に寄り添おうとする楠原氏がおのずと到達した、一種の新しいスタイルだったのである。

第一に、韋君宜の回想録の訳文が極めて禁欲的である点。これは、情緒的に流れたり飾ったりしない、事実を忠実に描写しようとする韋君宜の態度を体現・尊重した訳文なのであろう。

第二に、人物・事項に関する細かい訳注。『思痛録』では、中国の文学芸術界の中心にいた多くの人々を実名でとりあげており、楠原氏は一々注釈を徹底させている。巻末の人名索引によって、韋君宜による、彼らと同時空の情報と、楠原氏による客観的な情報とを得ることができる。

第三に、テキストの相違に関する異様に詳しい校勘。訳文を読んでいるときは、なぜこれほど詳しくテキストの相違が記述されるのか、いぶかしく思った。しかし、論考を読むに至って、北京版と香港版の相違を議論することによって、韋

君宜の思索の跡が示されるだけでなく、北京の政界や文学界で何が問題視されつづけているかが明らかになっていく。つまり楠原氏は「記憶の中の中国革命」と言いながら、じつは記憶によって歴史を記録するだけでなく、歴史を記録する行為そのものの現在的問題を論じているのである。

第四に、『思痛録』が記述の禁忌を乗り越えている事柄を的確におさえて、論考でそれを詳細に議論していること。例えば、『思痛録』は延安での搶救運動（整風）を詳しく書いているが、これは一九九〇年代まで禁忌だった。論考では、この問題が取り上げられていくプロセスを『聞一多全集』の注釈などから掘り起こしつつ、その流れに『思痛録』を置くとともに、韋君宜の別の小説『露沙的路』も取り上げて論じる。

第五に、『思痛録』への注釈作業から文学社会史的な研究に進んでいる点。政治の動きのなかで、『人民文学』や『文芸学習』などの雑誌の転変、それに関わった人々の動向が浮き彫りにされる。これは、文学史や文壇史とは異なる記述方法である。

要するに本書で楠原氏は、韋君宜という一作家に寄り添いながら、一般的な評伝というかたちを超えて、独自な記述方法を見いだしつつ、現代中国の文学・書くことと政治の関係を明らかにしていると言える。

二

以下は私の感想。韋君宜は、北京の高級知識分子の個別の事情まで、じつに詳細に記録している。私たちは、楠原氏の方法にならい、この記録から入って、彼ら個人の経験世界を認識していくことが可能だろう。[1]

例えば、第九章で言及される許覚民である。韋君宜によれば、彼は造反派に尋問されて「あっさりと「反党するためだ！」と答えるのを、私は聞いた」と書いている（一九三頁）。この記述は、許覚民が気骨の持ち主だったことを伝えているのだろうが、彼はその後、韋君宜より長期にわたって幹部学校で改造を続けなければならなかった（四六〇頁）。この二つの事情は関連しているのだろうか。この問題は、許覚民についての今後の認識を進める端緒となる。

許覚民という人は、本書で言及されていないが、北京大学の右派学生として批判された林昭のおじであった。林昭は、反右派で批判されたのち、一九六〇年に地下出版物『星火』の事件に関わって逮捕され、六八年に銃殺された。[2] 許覚民は、二〇〇〇年に『林昭、不再被遺忘』（長江文芸出版社）を、二〇〇六年に『走近林昭』（香港明報出版）を編んでいる。同じ頃の胡傑監督のドキュメンタリー『寻找林昭的灵魂』では、

許覚民本人がインタビューに登場する。韋君宜の言及は、許覚民の歴史への態度を認識する端緒となる。

禁忌を超えようとする韋君宜ではあるが、大飢饉についての言及は多くない。王兵監督のドキュメンタリーで有名な和鳳鳴の回想録『経歴――我的一九五七』（二〇〇一年）とは対照的だ。おそらく、韋君宜のいた北京ではそれほど情報が多くなかったのと、自分の経験を書くという姿勢が起因しているのだろう。

その一方で、自分の経験を書くということは、「老革命家」あるいは高級知識人の立ち位置から書くということにもなる。例えば、彼女は反革命鎮圧運動について、「四川から、六万の反革命を殺さなければならない、との電報が来た……彼らがこの返電を受けた時には、六万人はもう「始末」された後だった。彼（陸定一）が簡単に付け加えたこの言葉に、私はたいへん大きな衝撃を受けた。この言葉を通して私は感じた――ああ！　この六万人の生命は、党にとっては、歯の隙間にはさまった食べ滓か、骨のくずのようなものなのだ！しかし、これらのことは若い時から革命に身を投じてきたわれわれ青年とは確かに関わりのないことだったので、衝撃はまだそれほど大きくはなかった」とある（六八頁）。「大きな衝撃を受けた」といい、「衝撃はまだそれほど大きくはなかった」という。「関わりがない」、自分は「始末」される側ではない。

第一五章で韋君宜は、文革後の冤罪事件への対応を書いている。彼女は工作組の一員として農村に入り、死者の出た事件について調査した。「農民がなぜ追いつめられて自殺したかについても、県委書記の責任だとは書けなかった。地主でない人が誤って地主と認定され、殴り殺されたことについても出身成分認定の誤りの冤罪事件としか書けなかった……むだ死にした人の命のことを、それ以上追求する方法もなければ、その権限もない。……一人の記者（自分）がこのように追求することは、すなわち局面を混乱させようとするものであり、有罪だ……（追求しないということを）考えれば考えるほど理にかなっていると思ったが、それと同時に私はますます眠れなくなった」（二〇三頁）。この章は、冤罪事件の清算の具体例を記録していて興味深いのだが、韋君宜は文革で批判されながらも復活し、紀律検査委員とともに農村の党書記や公安局長を調査する立場なのである。

『思痛録』香港版の序文にこうある。「かつて党のために自分を犠牲にした私心のない人が、どれほど無実の罪を着せられて亡くなったことか、右派に認定されたことか」。「その意味は、正しいのはやはり党だということなのである」。こう

書いておりながら、結論的には「これまでの指導者はそんなによくなかったが、後の指導者はやはりよい、彼らは結局のところ祖国と人民のために力を尽くしている。少しぐらい間違えても、われわれは耐えて許そう」。ここでいう「これまでの指導者」とは毛沢東であり、「後の指導者」とは鄧小平・胡耀邦なのであろう。「少しぐらい間違えても」とは、党による冤罪を認めながらも、正しいのは党だと堅持することをいっている。冤罪の清算に多少の非情や間違いがあったとしても、許すべきだ。自分が農村での冤罪調査で、正当な責任追及をすべきではないと悟ったのと同じように、これから中国はよくなるのだから許そう。

「老革命家」として共産党を信じることしかできない彼女は、しかし、と言うか、だからこそ右派とされた冤罪に対して発憤する。党の多少の間違いは許すと言いつつ、冤罪を放置することに眠れなくなるような煩悶が起こる。この煩悶と「書くこと」は結びついている。党の犯した過ちを隠匿すれば、また同じ過ちを犯すかもしれない、だから「真実」を記述したい、と彼女は考えている。

この韋君宜の態度に、一種の歯切れの悪さを感じるのは、私だけではないようだ。同じ『思痛録』を分析した福岡愛子氏は「逡巡」という語を使っている。[3] とはいえ、だからこそ、この煩悶・逡巡に韋君宜の記録した歴史の「真実」が窺えるとも言えよう。『思痛録』の序文を分析して、楠原氏はこうまとめる。「「共産主義」の理想への信念をもち、共産主義を堅持すべしと言うのではなく、共産主義は駄目だと言っているのでも決してないが、しかし、共産主義がよいのかどうかをも含めて、自由と民主を実現しうるどのような思想・政体がありうるのか、後世の人々に大本のところから考えてもらいたいと言っているのではないだろうか」（三六七頁）。本書が考察の軸としたテキストの差異の問題も、おそらくこの問題に関わってくるのだと思われる。

【注】

（1）最近、彼らの反右派運動における檔案が出版されたので、個別に参考できる。宋永毅主編『千名中国右派処理結論和個人檔案』国史出版社、二〇一五年。その二四六頁にみえる、中央宣伝部が党中央に報告した右派処理のリストに載る人々の多くが、本書に登場する。

（2）土屋昌明・〈中国六〇年代と世界〉研究会編『文化大革命を問い直す』アジア遊学、勉誠出版、二〇一六年一一月を参照。

（3）福岡愛子『文化大革命の記憶と忘却』新曜社、二〇〇八年、第六章、二五二頁。

（つちや・まさあき　専修大学）